

『ファースト・アトミック』  
～GHQがつくった戦後ニッポンと「過ち」～  
——森田靖郎（作家）のレジメとして

「原発をやめられない社会とは、何か？」

過ぎ去った日々の苦い思い出は、消えては浮かぶ残像のようなもの、週末になると、いつか見た残像が現実となる。

「紫陽花（あじさい）革命」を知っているだろうか。毎週末、首相官邸前に集まるデモのことを誰かがこう呼んだ。原子カムラの言いなりになった知的源泉のない首相の決断に、大飯原発再稼働に反対する市民は、毎週末首相官邸付近に集まる。デモは、70年安保世代と「首都圏反原発連合」がツイッターなどで呼びかけた子連れや若い世代だ。100人規模だったデモは、「原発を許したぼくらは被害者であると同時に加害者になる」と10万人を超えた。3・11、あの「非常時」を忘れず、大きな声も出さず、ゆっくりと歩き、違う意見も否定せず「楽しい発電生活」に備えている。国会議員もあわてて駆け付け「白い風船」を配っている。ベルギーの少女連続誘拐事件（96）の司法の対応に抗議した30万人デモにあやかっただけのものだ。残念ながら、メディアはこの熱気をあまり伝えていない。

デモで出会った同世代人は、「70年安保、あの時変わっていたら……」と、原発だけではなく、脱昭和こそ次世代への責任だと、奥さんと同伴でデモに参加したそうだ。

ぼくにとって胸キュンの残像もある。79年夏、手の平に収まる小さなモノが、ライフスタイルや社会そして時代を「変える」瞬間を体感した。音を自由に持ち運ぶ「ウォークマン」の出現で、音楽が変わり、マチが流動し、ぼくらのパフォーマンスが時代を追い越した。「商品はモノ」ではなく「コト」なのだ……。生活をデザインした商品は、消費者を生活者と言い換えた。

ウォークマンの登場と同じ年の同じ夏に「地平線会議」が生まれたのは偶然ではない。既成のワクを破り、「なにかを変えよう」と、生身の人間の地球体験の報告会は、「ヒト」が「コト」を生み出す「磁場」となった。

「生野暮熱鈍（きやぼねつどん）」、生真面目（きまじめ）で、野暮で、熱っぽく暑苦しい、鈍臭い人間たちの「観夢土下座（Come Together）」は、400回、30余年、耕しつづけ「人間話法」を実らせた。そして2012年夏、「ヒトからヒト」がなにかを変えようとしている現場に、ぼくらは立ち会っている。

3・11後、ぼくらはなによりも人間のあり方を深く見つめることの大切さを知った。原発に「？」を感じながらも経済的豊かさを甘受し、自分らが使う電力を遠い原発村に押し付けてきた愚かな人間であったと、気づかされた。沖縄に基地を押し付けたのも同じ過ちだ。進歩、努力、発展こそが善と教えられてきたぼくらにとって、エゴは悪であると……。ヒトは善をなさんとして悪をなすものだ。だが、我欲のニューリッチは善悪も貧福の礼もわきまえない。

便利に慣れるとヒトは退化する。電気を使い過ぎることで、人の暮らしは空しくなってきた。 「人間」を取り戻すために、多消費社会から「変わろう」と、国会周辺に集まる。ヒトは集

団化すると次に共通の敵を探し団結するもの。再稼働だけが問題なのではない、国民の声を「音」と無視する野田首相の政治的、人間的感性の鈍さに敵意さえ感じ始めている。大飯原発再稼働について野田首相の演説は、国民の生命と引き換えに国民生活を守るという、論理も倫理も欠いた政治の詐術だけが見え、東大話法がいかにも空疎なものかを露（あらわ）にした。東大話法とは、命名した安富歩東大教授によると「一にも二にも立場でモノを言う、どんないい加減で辻褃が合わないことでも自信満々で話すこと」だそうだ。立場や肩書でなく現場でモノを言う「現場話法」の人間は自分の言葉に責任をつい持ってしまう生真面目さがあるからできそうにもない。ぼくらは、原発でも安保でも、東大話法で煙に巻かれてきたのではないか……。

歴史が未来の礎（ルーツ）であることは、誰も承知だ。ぼくは「原発をやめられない社会とはなにか？」を模索して、『ファースト・アトミック』～GHQがつくった戦後ニッポンと「過ち」～を上梓した。そこでぼくらがいま患っている社会病を見つけてしまった。

ぼくはGHQと同世代だ。戦後の自分史を辿ると、戦後ニッポンが鑑としてきたアメリカという国を丸ごと信用してはならないと、思い始めている。アメリカニズムといわれる感染症が、近年、先進国に蔓延しているそうだ。アメリカニズムはアメリカナイズとは違う、高度に工業化した社会の次に訪れるのは、貿易立国だ。世界に通用する工業製品が生み出されると、必然的に貿易が栄え、貿易黒字で国家が強大化する。アメリカや、ヨーロッパの先進国が辿ったように、日本も中国も同じ道を歩んでいる。この病には、絶えず外的刺激を求めその後に精神の荒廃と道義的マヒ状態が続く症状があるようだ。日本も例外ではない。近年、政治、経済そして社会の崩壊現象、家庭崩壊や学校崩壊、そして時間（歴史）や空間（領土）に関心が無い一部の若者たちが行き着く援助交際などもこの病の末期的症状なのか。

安保や原発を売り込んだアメリカ人は、国家的商人だ。アメリカは、その後、膨大な規模の生産と補給をビジネスとして、日本市場を蚕食（さんしょく）した。

戦後、「自由」が前提となったこの国で、ぼくらは時々「自由をはき違えている」と思う言動に出くわす。「自由は誰かの犠牲の上で成り立っている」と自分で学び取ってこなかった。ぼくらは「自由」を、ガムかチョコレートのようにGHQの手土産くらいにしか感じてこなかった。「自由」を社会との関わりで考えずに、「個人」に留めてしまったことで、「自由をはき違えるエゴイズム」にも目をつむってきた。これもアメリカ病か。

文化的には未成熟で性急でぎこちなく、歴史的にみても近視眼的な現代の病に、弱点を見つけた。「ヒトからヒト」への「人間話法」に感染しない。「原発をやめられない社会をやめよう」と、ヒトの連鎖はこの社会病に無縁だ。『ファースト・アトミック』を書き終えて、ぼくの戦後がようやく終わったような気がする。（森田靖郎）